

のかぶらきのわたりに行てわたらんとするに、渡りせんとするもの雲霞のごとし、おのゝ物
をとりてわたす。このけいたう房、わたせといふに、わたし守き、もいれでこぎいづ、そのときに
この山ぶし、いかにかくは無下にはあるぞといへども、大かたみ、にもいれずしてこぎ出す、そ
のときにけいたう房は、をくひあはせて、念珠をもみちぎる、このわたし守見かへりて、をこの事
と思たるけしきにて、三四町ばかりゆくを、けいたう房見やりて、あしをすなごにはぎのなから
ばかりふみ入て、目もあかくにらみなしてすゝをくだけぬともみちぎりて、めし返せくときさ
けぶなを行すぐるときに、けいたう房けさと念珠とをとりあはせて、江ちかくあゆみよりて、護
法、めし返せ、めしかへさずはながく三寶に別たてまつらんとさけびて、このけさをうみになげ
いれんとす、それを見て此つどひゐたるものども、色をうしなひてたてり、かくいふほどに、風も
ふかぬに、このゆく舟のこなたへよりく、それを見てけいたう房よりめるは、はやういでお
はせくときすはなちをして、みるものいろをたがへり、かくいふほどに、一町がうちによりきた
り、そのときけいたう房、さていまはうち返せくときさけぶ、その時につどひて見るものども一
こゑに、むさうの申やうかな、ゆゑしき罪にも候、さておはしませくといふとき、けいたう房今
すこしけしきかはりて、はやうち返し給へとさけぶとき、このわたし舟に、廿餘人のわたるも
の、つぶりとなげ返しぬ、そのときけいたう房、あせをしのごひて、あないたのやつばらや、まだ
しらぬかといひて、たちかへりにけり、世のすゑなれども、三寶おはしましけりとなん。

〔義經記〕^七如意の渡りにて義經を辨慶うち奉る事

夜も明ければ、如意の城を舟にめして、わたりをせんとし給ふに、わたしもりをば、平ごんのかみ
とぞ申ける、かれが申けるは、しばらく申べき事候、是は越中の守護近き所にて候へば、兼て仰か
うぶりて候し、間山臥五人三人はいふにおよばず、十人にならば、所へ仔細を申さでわたしたら